神奈川県立歴史博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

論題	「東海道名所風景」における現・神奈川県域の表現
著者	桑山童奈
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告―人文科学―　第 29 号
ISSN	0910-9730
刊行年月	2003 年（平成 15 年）3 月
判型	JIS-B5（182mm × 257mm）

【資料紹介】

「東海道名所風景」における現・神奈川県域の表現

桑山童奈

【キーワード】東海道　浮世絵版画　名所　神奈川

【論文要旨】

「東海道名所風景」は文久三年（一八六三）の四月から七月にかけての改印を持つ一六〇点以上におよぶ大判錦絵竪形の揃物である。文久三年二月に出発し、六月に帰還した十四代将軍徳川家茂（一八四六～六六）の上洛を題材にしており、「御上洛東海道」、「合作東海道」などと呼ばれた。景観や旅の風俗に加え、画中に家茂上洛をイメージさせる大名行列が描かれていることが特色である。日本橋から京都まで行き、京都では公式行事ほか遊山し、伊勢神宮などへ足を延ばし海路江戸へ戻る行程を複数の浮世絵師が描き、複数の版元から出版された。このなかで現・神奈川県域の名所は三一点（あるいは三二）と、東海道の宿駅ではない名所も多く取り上げられている。通常の五十三次の揃物とは異なる「東海道名所風景」は数多く残された同種のシリーズの中ではその出版の契機・場所の選択の意義も考察に値すべきものと考える。

はじめに

「東海道名所風景」は文久三年（一八六三）の四月から七月の改印を持つ大判錦絵竪形の揃物である。文久三年二月に出発し、六月に帰還した十四代将軍徳川家茂（一八四六～六六）の上洛を題材にしており、「御上洛東海道」、「合作東海道」などと呼ばれたという。[1] 複数の浮世絵師が描き、複数の版元から一六〇点あまりにわたって出版された。行程は日本橋を出発し、時には東海道から少し離れた名所をたどりながらも京都まで行く。京都では将軍の公式行事を想定させる「紫宸殿」ほか、社寺参詣などを行い、さらに那智の滝、伊勢神宮へ足を延ばし江戸へもどるものである。

初代歌川広重（一七九七～一八五八）の保永堂版「東海道五拾三次之内」を代表的な存在として、東海道沿道の風景を描いた錦絵シリーズは数多く残された。しかし、それらの多くは出発地の日本橋、終点の京都をあわせて五五点、さらに目録を加えることもある揃物として残されている。そのなかでこの「東海道名所風景」の一六〇点を越す数は際立ったものであるように思われる。その中に、現・神奈川県域を描いたものは三一点（あるいは三二点）を数える。東海道の宿駅は九つであるので、宿駅以外にも多くの場所が紹介されていることとなる。

このシリーズは、東海道沿道の博物館において宿駅の昔の姿を紹介するために展示されることはあっても、それ以上の関心を持たれることは少なかった。しかし、このような東海道の沿道を描いたシリーズにおけ

る、宿駅ではない場所の取捨選択が意味することや表現を時代背景もあわせて考えることは、展示に使用するために必要な研究と思われる。本稿は平成十四年より始めた文部科学省・科学研究費の研究の端緒とするべく、当館のある神奈川県域を描いた作品に焦点をあててみるものである。

一　「東海道名所風景」

「東海道名所風景」は目録に記された外題である。それぞれの作品の画面では「東海道」「東海道之内」「東海道名所之内」という言葉に地名が続く外題が赤い短冊形に記される。目録ではそれぞれの地名をあげた後、「通計一五五点」と明記している。

現在までのこの揃物に関する記述では、総数を目録通り一五五点とするもの[2]、各宿駅一点づつ計五五点とみなしているもの[3]などがある。近年にいたって一六六点[4]、など一六〇点を超すシリーズとして紹介される。したがって従来からこの揃物については総数、言い換えれば旅の全貌が掴みづらいものであった、といえる。

それは、「東海道名所風景」が、ひとつの揃い物として収蔵されてはいても、その所収点数にばらつきがあることによる。管見の限りでは、豊橋市美術博物館所蔵のものは表紙、目録、口上の三点をあわせて一六四点ある。国立国会図書館では一冊の画帖の状態で目録を含む計一四一点保存されている。写真カードで確認したのみであるが、東京国立博物館では目録を含めて一五七点が二冊の画帖となっている。同様にマイクロフィルムでしか見ていないが、東北大学狩野文庫ではやはり画帖で目録を含めて一二四点が収蔵されている。

この結果から、表紙、口上、目録ほか、一六二点を確認した。つまり目録にはない場所、例えば江戸への帰還の途中の場所も描かれている。後述するがさらに一点、このシリーズに含まれるのではないかと思われる錦絵がある。管見ではそれを加えて合計一六六点となる。画帖の場合、所収の順番が異なっていることもある。所収点数や順番が異なることで、揃物としての意味や受け手への印象は少なからず変わってしまうように思われる。

調査が不十分な現状ではあるが「白鳥明神」（艶長）には文字の有無など三種の摺の違うものがあり、版元印も二種みられることを確認した[5]。ほかの作品もぼかしの位置や色づかいに違いがみられ、現在では評価が高くはないこのシリーズも当時はそれなりに版を重ねたという推測をおこなってよいと思う。

当館ではマクリの状態で四〇点余を所蔵する。本稿では当館蔵のもの、実見することのできた国立国会図書館および豊橋市美術博物館蔵のものを基本として考察を行う。

描いた浮世絵師として目録には一陽斎豊国（三代歌川豊国）・一立斎広重（二代歌川広重）・一猛斎芳虎・一寿斎国貞（二代歌川国貞、後の四代歌川豊国）・一蘭斎国綱（二代国綱、後の二代国輝）・一鴬斎国周・一松斎芳宗・一魁斎芳年・一英斎芳艶・（芳艶）門人艶長・一光斎芳盛・玉蘭

斎貞秀・一震斎芳形・一恵斎芳幾・狂斎洞郁（河鍋暁斎）の一五人の名が記される。また目録には名前はないが国福という署名のある「石薬師其二」（あるいは「石薬師庄野之間」）がある。国福の作品は外題も目録に見られないため追加して出版されたと考えられる。初代歌川広重、歌川国芳（一七九七～一八六一）亡き後の浮世絵界における長老というべき三代歌川豊国（一七八六～一八六四）を筆頭に当時を代表する絵師たちが腕を振るっている。「江之島」（国貞・広重）のように、一枚の絵を複数の絵師で描き分けているものもいくつかある。十六人は数を均等に分担しているのではない。二代広重の三一点（一人で描いたもの。一枚を分担したものがほかに三点ある。）や河鍋暁斎の二六点（同二点）、三代豊国の一八点、芳艶の一六点などが多いほうである。少ない絵師であると芳幾、艶長および芳形がそれぞれ二点しか描いていない。

版元は越嘉・伊勢屋兼吉（伊勢兼）・上州屋重蔵・重七（上重）・遠州屋彦兵衛（遠彦）・大黒屋金之助・金次郎（大金）・鍵屋庄兵衛（鍵庄）・丸屋鉄次郎（丸鉄）・上州屋金蔵（上金）・佐野屋富五郎（佐野富）・正文堂・糸屋庄兵衛（糸庄）・相卜・越村屋平助（越平）・山本屋平吉（久山本）・魚屋栄吉・太田屋多吉・海老屋林之助（海老林）・辻岡屋文助（辻文）・丸屋甚八（丸甚）・福忠・菊屋市兵衛（菊市）・近江屋久助・久次郎（近久）・伊勢屋庄之助？（伊勢庄）・角本屋金次郎（角金）・大の印がみられる。[6] 錦絵作品にはよく見られるが、このシリーズでも船の帆や茶店の幕などに版元の名を染め抜き、その宣伝を行っている作品も複数見られる。[7]

豊橋市美術博物館所蔵の口上には「旅中の滑稽名所古跡名産等ことごとにあらはし新景を生写して」とある。その通りに画面に表現されている情景は景観だけを写したものではない。画面には大小の違いはあるものの、家茂上洛のイメージに結びつけることができるような大名行列が描かれているものが大部分である。土地にまつわる行事や景観を見物している若い殿様の様子や、下級の武士たちの旅路での滑稽な姿が描かれたものもみられる。ごく小さく行列が描かれているものでは、庶民の旅の姿に視点を当てているものもある。

もちろんこの時代なので、直接的にそれらを将軍の上洛の姿として表現している訳ではない。あくまでも特定できない大名が通行する東海道の風景表現として描かれている。

京都に到着してからも「紫宸殿」（芳盛）、など実際の将軍上洛でも行われた行事に加え、実際には将軍が訪れることはないであろう「島原」（芳幾）、「四条河原」（三代豊国）など浮世絵の購入者達の関心の的であった場所をも紹介するため、多くの点数が制作された。

この揃物では大名行列の存在だけが、統一されているように思われる。ほかには作画に関しての約束はなかったのではないだろうか。家茂を彷彿させるように描かれた人物たちも、特に共通する要因を持たない。また、画中には鳥瞰図によく見られるような小さな短冊形で地名を示している作品が複数みられる。場所を説明する性格を強く持たせているように思われる。

「東海道名所風景」と同様の趣向の揃い物に慶応元年（一八六五）に

出版された「末広五十三次」がある。この年に行われた家茂の再度の上洛に際し制作されたという。こちらも複数の絵師による分担で、複数の版元から出版され、画中には大名行列が描かれる。元治元年（一八六四）に亡くなった三代歌川豊国以外は、河鍋暁斎や月岡芳年など絵師も複数が共通している。しかし「末広五十三次」はほかの多くの東海道の揃物と同様に五十五枚と目録で構成されている。

したがって、「東海道名所風景」は文久三年の将軍家茂上洛をきっかけに、稀にみる点数により構成された東海道の揃物といえる。

この揃物の全体に関する分析は別の機会におこない、本稿では、現神奈川県域の表現に絞り、紹介し考察してみたい。[8]

神奈川県内の宿駅・名所

前述したように、現・神奈川県域の名所を描いた作品は三一点を数える（表一参照）。これは京都の中だけで二七点を取り上げていること、現神奈川県域に宿駅は九つしかないことを考えると、このシリーズにおいて武相の名所が占める割合は少なくない、といえる。おそらく江戸近郊ということで既にこの地域の場所がよく知られていたことが大きな理由であろう。

この区間の特色としては、まず東海道をそれた場所が数点見られることであろう。金沢八景や鎌倉などはほかの五十三次の揃物では見られない。「東海道名所風景」は川崎から程ヶ谷までは東海道をたどり、その後金沢道と呼ばれたルートをたどるかのように鎌倉、江ノ島方面を訪れ、戸塚から再び東海道を進んでゆく。

将軍家茂の上洛について記された『昭徳院殿御上洛日次記』[9]には、家茂は二月十三日出発し、川崎に宿泊、十四日は戸塚、十五日は大磯、十六日は小田原、十七日に三島に宿泊している。鎌倉や江の島方面へ足を延ばしたという記述は見られない。おそらく江之島方面への遊山は行われなかったのではないかと思われる。このシリーズが将軍上洛という事実に沿って制作したというよりは、享受者がより楽しめるような創作をふんだんにまじえて制作されている、とこの点からも考えられるだろう。

その上で他の五十三次を題材とした揃物では、宿駅の地名を持つ錦絵に描かれる事が多い立場や近隣の名所を独立させている。すなわち「遊行寺」が「藤沢」から、「鳴立沢」が「大磯」から独立したように、詳しく名所を描き分けている、といえる。川崎から箱根まで、目録と実際に出版されたものを照合すると、例えば目録では「湯元」であるのが作品の外題では「ハコネ湯治」であるなど、やや表記が異なっているものもある。目録では小田原は一点であるが、実際には二点ある。

当館所蔵の丹波コレクションには、丹波恒夫氏（一八八一～一九七一）の「相模の浮世絵を集める」[10]という収集方針の結果、現・神奈川県域の名所を描いた錦絵はかなり充実して揃えられている。それでも残念ながら、この揃物のうち「梅澤」（暁斎）と「小田原」（国綱）が欠如している。

改印は殆どが亥四（文久三年四月）であるが、「生麦」、「由比ガ浜」、

「遊行寺」、「鴫立澤」、「南湖」、「梅澤」、「箱根山中猪狩」が五月、「神奈川浦島古跡」、「箱根山中陰石」、「箱根畑」は六月、「権太坂」が七月と「大磯」が判読不能である。

今回までの調査では、「神奈川浦島古跡」、「程ヶ谷」、「小田原」（二代広重）、「箱根畑」は、数が少ない揃物の場合、共通して含まれないことが判明した。「神奈川浦島古跡」や「箱根畑」のように改印がほかのものより遅いものもあるが、「程ヶ谷」と「小田原」（二代広重）は改印が四月であるので流通の上で、何かほかの錦絵と異なる事情があったのかもしれない。

以下、それぞれの作品を見ていきたい。本稿においては、このシリーズ中しばしば登場する家茂を彷彿させる若い殿様を単に「殿様」と、家茂の上洛行列をイメージさせる行列を「大名行列」と表記する。題名にはかっこに入れて目録の表記を付記する。

東海道　川崎（川崎）図1　二代広重

行列が船で多摩川、六郷のわたしを越えているところ。

東海道　大師河原（大師河原）図2　二代広重

平間寺門前。大名行列に若い殿様の姿。

東海道名所之内　鶴見（鶴見）図3　二代広重

茶店で小休止する人々。殿様らしき人物。遠景の川（鶴見川か）に架かる橋にも行列が続いている。茶店の旗に版元名である「大金」と読めるものがある。

東海道之内　生麦（生麦）図4　貞秀

街道を進む隊列。土の色、人々の着衣の紺、赤と毛槍の白い色の対比が印象的である。手前から生麦、横浜、本牧の地名が記される。

東海道名所之内　神奈川浦島古跡（浦島寺）図5　暁斎

浦島寺と記された石碑の前を隊列が進む。遠景の山や富士は没骨で表現される。

東海道　神名川（神奈川）図6　三代豊国

これから台を登っていく隊列とそれを見送る茶屋の人々。右の前景には通りすがりの旅人らしき人々もいる。中央に描かれた茶屋の二階には遠眼鏡で海の向こうを見ている女性の姿がある。この茶屋の二階に人々がくつろぐ表現は初代広重の「五十三次名所図会　四　神奈川　台の茶屋海上みはらし」（大判錦絵　安政二年）にも見られるなど、神奈川の定番の表現といえる。

東海道　神奈川（同　台の下）図7　芳虎

台町を降りてくる隊列とそれを見送る神奈川宿の人々。目録には神奈川と同台の下とあるが、こちらの方が台の下に該当するものと考える。

遠くの海上には外国船とおぼしき船が浮かんでいる。時が開港後であることを感じさせる表現はこの揃物では、鮫洲（芳幾）に異国船が描かれる。遠景には右から石ザキ、切通、横浜の地名が記される。

東海道　程ケ谷（程ケ谷）図8　芳艶

程ケ谷宿を通過中の隊列の後ろ姿。たき火で煙管に火をつける仕種。提灯に「程ヶ谷宿」とある文字のみが場所を示す。

東海道　程ケ谷　其二（〔程ヶ谷〕其二）図9　芳艶

茶店の店先で喧嘩する人足達。別に走ってゆく供の姿。遠景には虹が描かれる。この程ケ谷二点は両方とも芳艶で版元も上重である。前述したようにこの二つのうち其二のほうが必ず揃物に含まれている。

東海道名所之内　権太坂（権太坂）図10　暁斎

雲形で区切った前景では茶屋でくつろぐ大名行列の人々が生き生きと描かれる。馬の腹掛けや茶屋の旗には版元である丸屋鉄次郎を示す意匠が凝らされている。後景は嶮しい坂を下る人々の姿が陰影で描かれる。

東海道名所之内　鎌倉金澤（鎌倉）図11　二代広重

一番手前に雲形を描き、その上に大きく毛槍を描き大名行列が通過中であることを示している。手前には鶴ヶ岡八幡宮の社殿を描き、さらにすやりがすみで区切った遠景の海上には野島が見える。地理的にいえば強引な構図であるといえる。かまくら、金沢能見堂一覧の文字が記される。

金沢八景は八景を一点、一点描きわけたものも、鳥瞰図的に大きく景観をとらえたものも数多くの錦絵として残された。一方、鈴木良明氏によれば鎌倉を「風景画」として描いた錦絵は少ないという。[11] 鎌倉が題材となる場合は静御前などが描かれる「歴史画」としてであるという。本図は鶴ヶ岡八幡宮を題材とした数少ない例のひとつといえる。

東海道名所之内　鎌倉七里が浜乃風景（七里ヶ浜）図12　三代豊国

海岸に牛に乗った女性。遠景に江之島、毛槍を持つ人々が申し訳程度に描かれる。

東海道名所之内　由比ケ浜（由比ガ浜）図13　芳年

前景右に大きく鳥居の一部をとらえ、その下で殿様が腰をかけ、羽ばたく鶴たちを見上げる。この情景は、源頼朝にまつわる鶴ヶ岡八幡宮の放生会の伝説に由来するとの考えがある。[12]

文久三年のこの上洛は直接的に表現できないため、源頼朝になぞらえた錦絵が「源頼朝公上洛之図」（大判三枚続、二代広重、伊勢兼）など他にも出版された。[13]

芳年はこの揃物では八点を担当しているが版元は、正文堂か角金である。

東海道名所之内　江之島（江の島）図14　二代広重　二代国貞

江之島の岩屋の前で腰掛け、海中にもぐる海女達を見る殿様の姿が描かれる。署名の位置から岩屋より上部が二代広重で海女ら海中の表現が二代国貞という分担であろうか。

東海道名所之内　江之島（江の島？）図15　貞秀

浜から江之島へ向かう大名行列の後ろ姿をとらえる。

本図は管見では他の所蔵先の「東海道名所風景」には見いだすことができなかった。大名行列が描かれていることや外題、改印（亥六）の時期などはこのシリーズと同様の形式である。また版元である糸庄はこの揃物において土山（二代広重）や石薬師（同）などを出版している。また江之島やその周辺に短冊型で地名などを細かく紹介している点も、本揃物の貞秀作品に通じる点がある。しかし彫牛之助はこのシリーズでは登場しない。現在のところ、不明な点の残る一点である。本図を加えると神奈川県域の表現は三二点となり、揃物全体として一六六点を数えることとなる。

東海道　戸塚（戸塚）図16　二代国貞

戸塚からまた再び、東海道を進む。駕籠から殿様が降り、浮絵で表現された室内の中央に立っている。家茂に結びつけさせるためかその顔は若々しく描かれている。通常、江戸を出発した場合、戸塚が一泊目の宿駅となる、という。「戸塚」の一般的なイメージよりも、この揃物の物語性を重視した一点であるといえる。

東海道　藤沢（藤沢）図17　芳形

馬の蹄を手入れする人足を前景に、通り過ぎてゆく大名行列を描いている。遠景に見える高麗山らしき山に施された陰影表現は稚拙である。

東海道名所之内　ふぢさは　遊行寺（遊行寺）図18　貞秀

遊行寺の山門を正面からとらえ、その前を通り過ぎていく大名行列を描く。多くの五十三次シリーズでは藤沢宿に遊行寺を描いている。本図ではそれらとは異なる角度で遊行寺をとらえている。江戸の方、鎌倉道、小栗堂、小栗七騎の墓、江の島みちなどを説明する。地面の色などは版元は異なるものの同じ貞秀による「生麦」と共通する。

東海道名所之内　四ッ谷（四ッ谷）図19　二代国綱

通り過ぎる大名行列の後ろ姿をとらえる。かなり遠景まで毛槍がみえる。富士の下にはやはり当時の名所として知られた大山が描かれる。初代広重「五十三次名所図会　南期の松原　左不二」に構図が似ていることが指摘されている。[14]

東海道　平塚（平塚）図20　二代広重

橋を渡る大名行列。富士より近景に大山が描かれる。

東海道名所之内　鳴立沢（鳴立沢）図21　暁斎

鳴立庵の前を通り過ぎる大名行列。鳴立庵の向こうにも毛槍が見える。

東海道之内　大磯（大磯）図22　三代豊国

山を下る大名行列が中景に描かれる。近景には遊女と禿が描かれる。遊女の着物が波に千鳥の文様であるので、五十三次のシリーズで頻繁に大磯と結びつけられる曽我物語の十郎の恋人であった虎御前であることがわかる。坂の形や石碑などは「五十三次名所図会」ほか初代広重による大磯の表現に酷似している。

東海道名所之内　南湖（南郷）図23　暁斎

松並木の間の街道を大名行列が下る。

東海道名所之内　梅澤（梅澤）図24　暁斎

通りゆく大名行列を平伏して見送る人々の姿が描かれる。「会」の地を抜いた旗を持つ武士がいる。会津藩の意であろうか。この「会」の旗を持つ武士達は京都を発った後の「兵庫築嶋寺」（暁斎）にも見られる。南湖・梅澤と大名行列を暁斎がまともに描いた作品が同じ版元（伊勢兼）から続く。

東海道名所之内　酒匂川（酒匂川）図25　二代広重

酒匂川の仮橋を渡る若殿と行列が描かれる。遠景には箱根二子、小田原の文字が記される。錦絵では酒匂川は保永堂版をはじめとして歩行渡しの情景が描かれることが多い。しかし本図で冬季に架けられた仮橋を歩む姿が描かれているのは、上洛の時期に合わせたものといえるであろう。[15]

東海道　小田原（小田原）図26　二代広重

五十三次の錦絵においては小田原は酒匂川を描くことが多いが、本シリーズでは酒匂川は別に描かれる。海岸の近くを通りゆく大名行列を描く。初代広重の「五十三次名所図会　海岸漁舎」と同様の景観であるが、本図では荒れる海の波をとらえている。左の遠景には「ハコネ」とある。数が少ない揃物の場合、小田原はこちらが含まれないことがある。

東海道　小田原（小田原）図27　二代国綱

名物のういろうやの前を通り過ぎる大名行列を描く。ういろうやの表現は『東海道名所図会』の表現に似ている。遠景に「箱根山」、「湯本」の文字が見える。駕籠の中に殿様の姿が見える。

東海道　箱根（箱根）図28　芳盛

関所の前を通り過ぎる大名行列を描く。何の変哲もない表現であるが、同じ芳盛の「草津」は本図を反転させたような構図である。

箱根は宿駅と関所だけではなく、湯治場として親しまれた七湯の風景

や人々が嶮しい山道をのぼる情景が、さかんに錦絵に残された。

東海道名所之内　箱根山中陰石（陰門石）図29　暁斎

川のそばを進む大名行列。その頭上には異様なかたちの松の根が巨大な岩にからみついており、「石根松」、「足柄松」、「陰石」とある。遠景に駒ケ岳、金時山などの文字が見える。浅学のため本稿ではこの巨岩のあった場所を特定することができなかった。初代広重の行書版東海道の箱根など大きな石が道ばたに見られる表現があるが、本図のものと同定できるものは見当たらなかった。

東海道名所之内　箱根山中猪狩（しし狩）図30　暁斎

急峻ながけで行われる猪狩を殿様は腰掛けてみている。この揃物は十人以上の絵師が筆を執っているため、ひとつのシリーズであっても、魅力のある構図のものも、そうとはいえないものも混在している。そのなかで暁斎の作品は細部までみるものを楽しませる表現が行われており、既に論考[16]がある。暁斎が筆をとった作品は全体的に多くの線を用いてかたちどり、的確な陰影表現を行っているため迫真的な表現となっている。

東海道　ハコネ湯治（湯元）図31　二代国貞・立斎（二代広重）助筆

雲形で区切った前景に汗を拭う浴衣姿の女性の立ち姿を描く。遠景では緑の山々が描かれ、湯本山、畑宿、芦ノ湯、二子山ほか詳しく地名が記される。山と山との間の「本海道」に毛槍と人々の頭で行列が示される。おそらく美人が二代国貞で、景観が二代広重という分担と思われる。

東海道　箱根　畑（箱根畑）図32　芳虎

茶屋の店先で馬から荷を下ろす人やくつろぐ人の姿を色彩豊かに描く。本図は茗荷屋が畑宿に実在したため、その資料として取り上げられる機会が多い。[17]

おわりに

以上、「東海道名所風景」に描かれた現・神奈川県域の表現についてみてきた。

景観に通過する大名行列を加えたもの、土地にまつわる故事や物語の人物を加えたもの、その土地ゆかりの光景を見物する殿様の姿、下級武士や庶民の楽しげな旅の風俗など、描き方はさまざまである。家茂を思い起こさせる若き殿様の実際よりも楽しい、空想上の旅の物語を味わうことができる。しかし旅物語の演出に重きが置かれているため、必ずしもその名所の情報を伝えるものではない。

また複数の絵師による競作のため、その完成度にも差が見られるように思われる。前述した暁斎のように線を多く描き、構図にも趣向がこらしてあるものもある一方、単に大名行列が宿場を通過する情景を描いた

ものは構図が平板になってしまう傾向がみられる。またもののかたちや陰影も稚拙なものもある。

文久三年にはこの「東海道名所風景」と同様に家茂上洛の行列を描いた「東海道神名川横浜風景」（二代国綱）、「東海道程ヶ谷之風景」（芳形）など一連の大判三枚続の作品が出版されている。「東海道名所風景」と同じころ、同じ絵師、同じ版元から出版されており、今後はその関連をあわせて考察したい。

【付記】

本稿は平成十四年度より始まった文部科学省科学研究費「浮世絵版画と名所に関する研究—東海道を中心に」（代表　橋本健一郎）の成果の一部である。本稿を成すに当たって資料調査をさせていただいた国立国会図書館、豊橋市美術博物館、神奈川県立図書館に御礼申し上げます。

註

（1）吉田瑛二「東海道名所絵」『浮世絵事典』中、緑風書房、一九六五年、二三二～二三三頁。神奈川県立図書館では画帖をばらしたような状態で計三一点が「御上洛錦絵」という資料名で所蔵されている。この通称が知られていたことを示すものであろう。

（2）卓爾「合作東海道名所風景」『浮世絵』三四号、一九一八年、二六頁。前掲註一「東海道名所絵」『浮世絵事典』。

（3）「合作東海道の絵日記」『季刊　浮世絵』第七号、一九六三年、二四頁。吉田漱「東京国立博物館所蔵〈御上洛東海道〉中の暁斎作品について」（『暁斎』三号、一九八〇年、二～一三頁）において、吉田氏は暁斎の錦絵だけで東海道ではないものも含めて二五点あることを疑問視しているが、全体については言及していない。

（4）横田泰之「〈東海道名所風景〉の河鍋暁斎作品について」『浮世絵芸術』一二〇号、一九九六年、三三～三四頁。豊橋市美術博物館『東海道宿駅設置四百年記念　歴史の道～東海道～』（二〇〇一年、三〇九頁）には、一六〇点を超すと記されている。福田和彦『東海道五十三次　将軍家茂公御上洛図』（河出書房新社、二〇〇一年。）ではE・キヨッソーネ東洋美術館に所蔵される「東海道名所風景」を紹介しており、総数は一六二景とある。目録等を含んだ数であるかは不明（一三七頁）。

（5）「吉原」（芳艶）、「四日市」（同）ほかは、画面に短冊のほかに「〇〇乃駅風景」という文字があるものと、ないものが見られる。また二川（国周）は短冊に記される地名が「二川」と「双川」の二種が確認できた。

（6）「大」の印は丸鉄版の「白鳥明神」（艶長）の異版と思われるものにのみ見られる。

（7）この揃い物は折れ帖仕立の形式のまま保存されていることが多く、版元印、改印がとじの部分となり、読めなくなってしまっているもの少なくない。したがって、わずかに読めるところから推定したものもあるので、間違って読んでしまったものもあると思われる。版元名については

「浮世絵版画の版元」（『原色浮世絵大百科事典』第三巻、大修館書店、一九八二年、一三四～一四八頁）を、また「東海道名所風景」の版元については、「御上洛東海道」『東海道広重美術館　館蔵品総合図録』（二〇〇二年、一四四～一六三頁）を参考にした。

（8）例えば前掲註三「合作東海道の絵日記」においては、この揃物が、文久三年が歌川国芳の三回忌にあたることから、その追善のための出版ではないか、と考察されている。しかし、総数を五五点と考えた上でのものなので、肯んじることができない。

（9）「昭徳院殿後上洛日次記」（『新訂増補國史大系　第五十一巻　續徳川實紀　第四篇』吉川弘文館、一九六七年。）

（10）丹波恒夫『浮世絵　江戸から箱根まで』朝日新聞社、一九六三年、一五頁。

（11）鈴木良明「浮世絵版画と名所地－金沢八景・鎌倉・江嶋・大山－」『都市・近郊の信仰と遊山・観光』地方史研究協議会、雄山閣、一九九九年、五三頁。

（12）前掲註二卓爾「合作東海道名所風景」。Keyes, Roger “Courage and Silence A study of The Life And Color Woodblock Prints of Tsukioka Yoshitoshi1839-1892”, University Microfilms International, Ann Arbor, 1983, P85. Stevenson John “Beauty and Violence Japanese Prints by Yoshitoshi 1839-1892” Havilland Press, Eindhoven, 1992, 34P.

（13）小西四郎『錦絵幕末明治の歴史二　横浜開港』講談社、一九七七年、八八～一〇三頁。ほか。

（14）『浮世絵にみる茅ヶ崎』茅ヶ崎市立図書館、一九八三年、二頁。

（15）『東海道宿駅制度四〇〇年記念特別展　箱根八里－小田原宿の景観－』小田原市郷土文化館、二〇〇一年、三一頁を参照。

（16）前掲註三、吉田漱「東京国立博物館所蔵〈御上洛東海道〉中の暁斎作品について」。前掲註四、横田泰之「〈東海道名所風景〉の河鍋暁斎作品について」。

（17）『神奈川の東海道（上）』神奈川東海道ルネッサンス推進協議会、一九九九年、五七頁。ほか。

東海道名所風景　現神奈川県域（未定稿）

	目　録	資　料　名	絵　師	版　元	改 印	署　名	彫　師
図 1	川崎	東海道　川崎	歌川広重（二代）	丸鉄	亥四改	広重画	
図 2	大師河原	東海道　大師河原	歌川広重（二代）	大金	亥四改	広重画	
図 3	鶴見	東海道名所之内　鶴見	歌川広重（二代）	大金	亥四改	広重画	
図 4	生麦	東海道之内　生麦	五雲亭貞秀	鍵庄	亥五改	貞秀画	
図 5	浦島寺	東海道名所之内　神奈川浦島古跡	河鍋暁斎	上金	亥六改	応需周麿	
図 6	神奈川	東海道　神名川	歌川豊国（三代）	伊勢兼	亥四改	応需七十八歳豊国筆	
図 7	同（神奈川）台の下	東海道　神奈川	芳虎	佐野富	亥四改	芳虎画	
図 8	程ヶ谷	東海道　程ヶ谷	芳艶	上重	亥四改	一英斎芳艶画	
図 9	程ヶ谷　其二	東海道　程ヶ谷　其二	芳艶	上重	亥四改	一英斎芳艶画	
図10	権太坂	東海道名所之内　権太坂	河鍋暁斎	丸鉄	亥七改	応需周麿	
図11	鎌倉	東海道名所之内　鎌倉金澤	歌川広重（二代）	伊勢兼	亥四改	広重画	
図12	七里ガ浜	東海道名所之内　鎌倉七里が浜乃風景	歌川豊国（三代）	辻文	亥四改	応需七十八歳豊国筆	
図13	由比ガ浜	東海道名所之内　由比ヶ浜	月岡芳年	正文堂	亥五改	一魁斎芳年画	
図14	江の島	東海道名所之内　江之島	歌川豊国（四代）・歌川広重（二代）	伊勢兼	亥四改	国貞画・応需広しけ図	
図15	江の島	東海道名所之内　江之島	五雲亭貞秀	糸庄	亥六改	五雲亭貞秀画	彫牛之助
図16	戸塚	東海道　戸塚	歌川豊国（四代）	相卜	亥四改	国貞画	
図17	藤澤	東海道　藤沢	芳形	越平	亥四改	芳形毫	
図18	遊行寺	東海道名所之内　ふぢさは　遊行寺	五雲亭貞秀	山本屋平吉	亥五改	五雲亭貞秀画	
図19	四ツ谷	東海道名所之内　四ッ谷	国綱（二代）（二代国輝）	越嘉	亥四改	国綱画	片田彫長
図20	平塚	東海道　平塚	歌川広重（二代）	魚栄	亥四改	広重画	
図21	鳴立澤	東海道名所之内　鳴立沢	河鍋暁斎	丸鉄	亥五改	応需周麿	
図22	大磯	東海道之内　大磯	歌川豊国（三代）	鍵庄	不明	応需七十八歳豊国筆	彫太田多七
図23	南郷	東海道名所之内　南湖	河鍋暁斎	伊勢兼	亥五改	応需惺々周麿	
図24	梅澤	東海道名所之内　梅澤	河鍋暁斎	伊勢兼	亥五改	応需惺々周麿	
図25	酒匂川	東海道名所之内　酒匂川	歌川広重（二代）	佐野富	亥四改	広重画	
図26	小田原	東海道　小田原	歌川広重（二代）	糸庄	亥四改	広重画	
図27	小田原	東海道　小田原	国綱（二代）（二代国輝）	菊市	亥四改	国綱画	
図28	箱根	東海道　箱根	芳盛	太田屋多吉	亥四改	一光斎芳盛画	
図29	陰門石	東海道名所之内　箱根山中陰石	河鍋暁斎	上金	亥六改	応需周麿	
図30	しし狩	東海道名所之内　箱根山中猪狩	河鍋暁斎	丸鉄	亥五改	応需狂惺々	彫太次郎
図31	湯元	東海道　ハコネ湯治	歌川豊国（四代）・歌川広重（二代）	海老林	亥四改	国貞画　立斎助筆	松嶋彫政
図32	箱根畑	東海道　箱根　畑	芳虎	大金	亥六改	芳虎画	

図24・27は神奈川県立図書館、ほかは神奈川県立歴史博物館蔵。

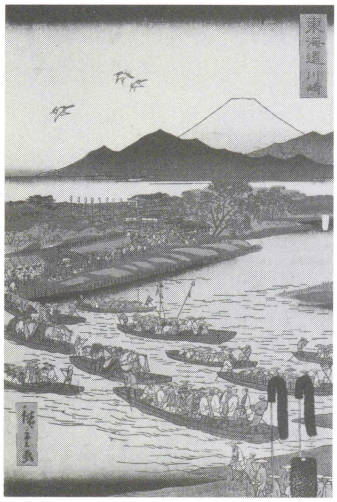

図1　東海道 川崎　歌川広重（二代）

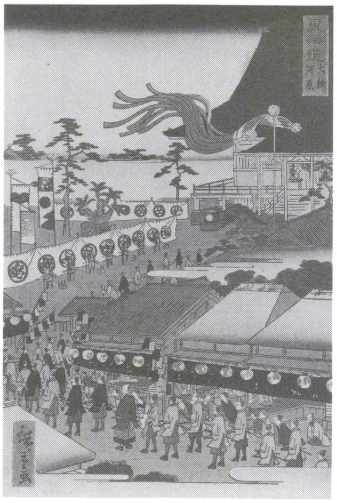

図2　東海道 大師河原　歌川広重（二代）

図3　東海道名所之内 鶴見　歌川広重（二代）

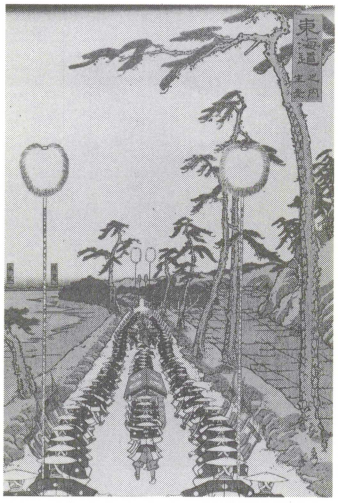

図4　東海道之内 生麦　五雲亭貞秀

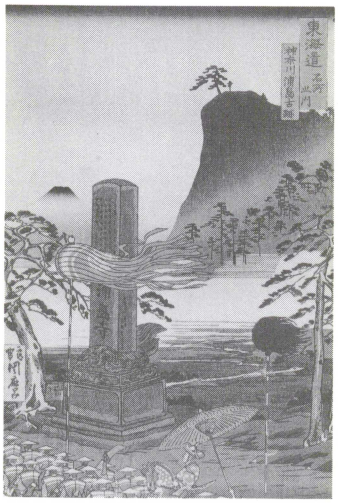

図5　東海道名所之内 神奈川浦島古跡　河鍋暁斎

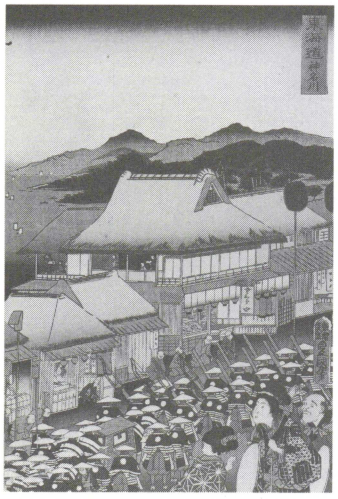

図6　東海道 神名川　歌川豊国（三代）

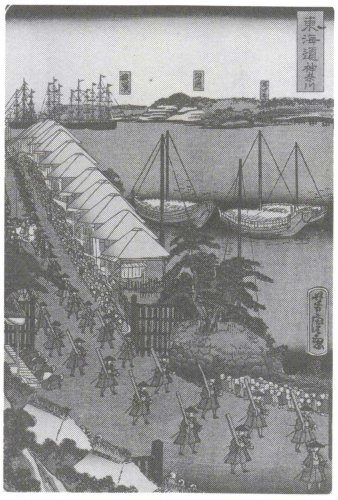

図7　東海道 神奈川　芳虎

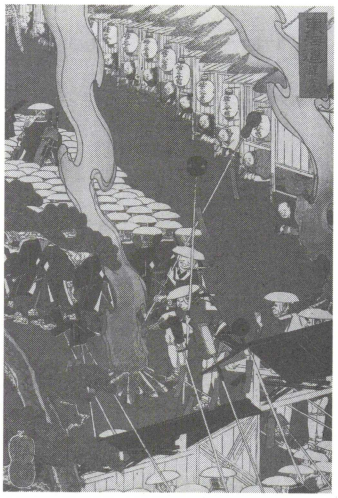

図8　東海道 程ヶ谷　芳艶

図 9　東海道 程ヶ谷 其二　芳艶

図 10　東海道名所之内 権太坂　河鍋暁斎

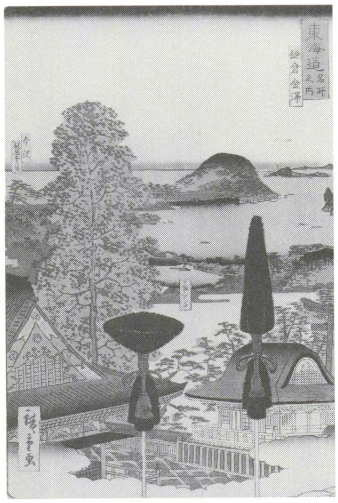

図 11　東海道名所之内 鎌倉金澤　歌川広重（二代）

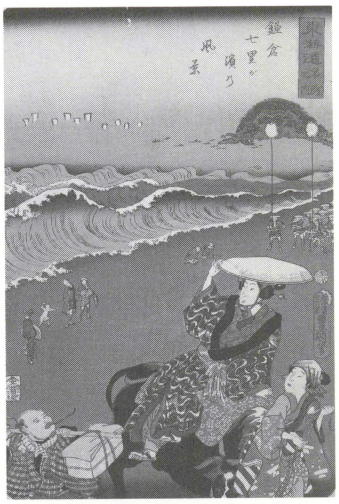

図 12　東海道名所之内 鎌倉七里が浜乃風景　歌川豊国（三代）

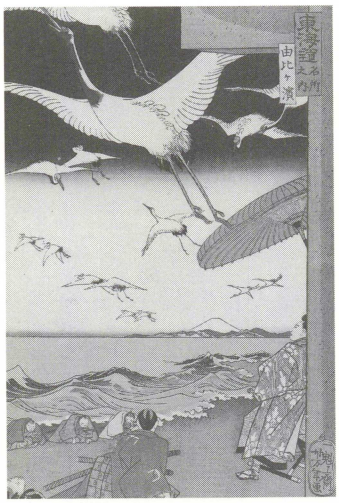

図 13　東海道名所之内 由比ヶ浜　月岡芳年

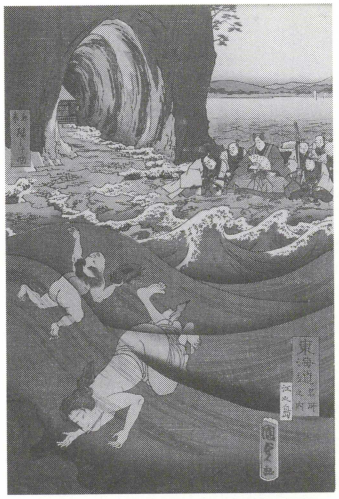

図 14　東海道名所之内 江之島　歌川豊国（四代）・歌川広重（二代）

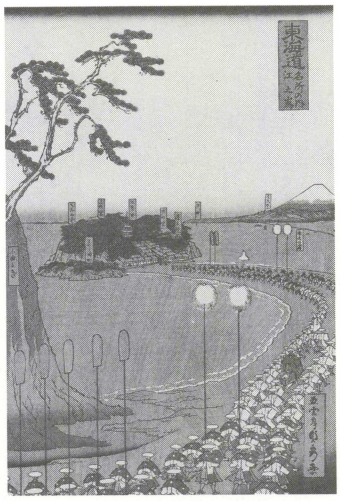

図 15　東海道名所之内 江之島　五雲亭貞秀

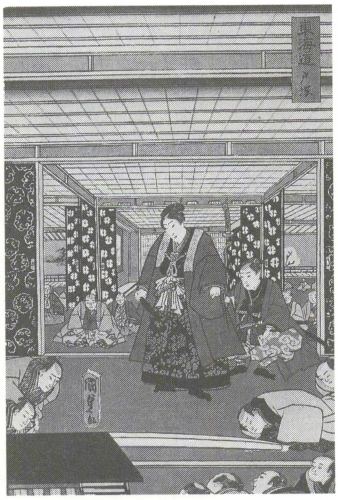

図 16　東海道 戸塚　歌川豊国（四代）

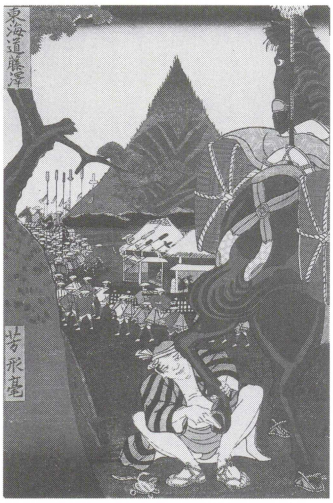

図 17　東海道 藤沢　芳形

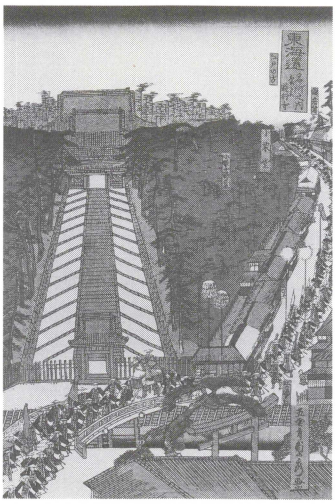

図 18　東海道名所之内 ふぢさは 遊行寺　五雲亭貞秀

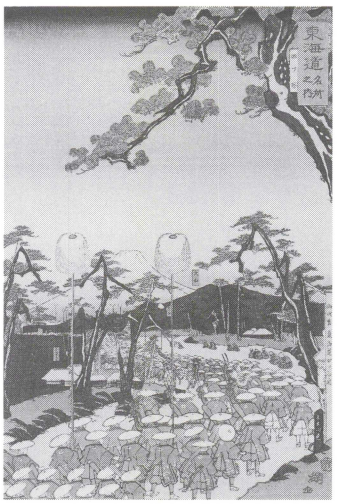

図 19　東海道名所之内 四ッ谷　国綱（二代）（二代国輝）

図 20　東海道 平塚　歌川広重（二代）

図 21　東海道名所之内 鴫立沢　河鍋暁斎

図 22　東海道之内 大磯　歌川豊国（三代）

図 23　東海道名所之内 南湖　河鍋暁斎

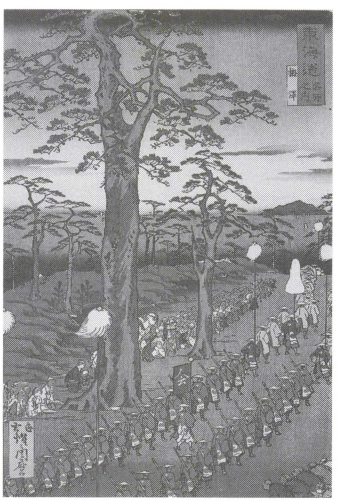

図 24　東海道名所之内 梅澤　河鍋暁斎
神奈川県立図書館蔵

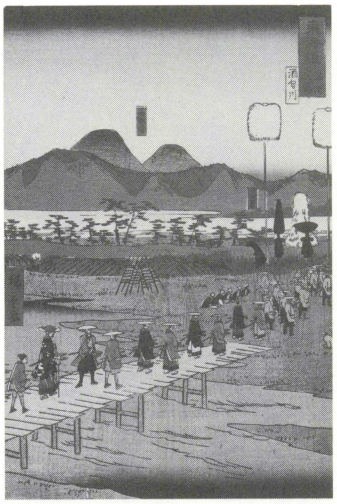

図 25　東海道名所之内 酒匂川　歌川広重（二代）

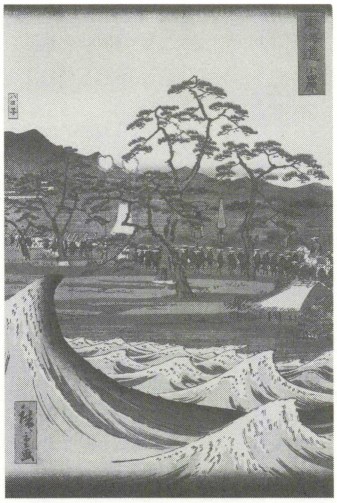

図 26　東海道 小田原　歌川広重（二代）

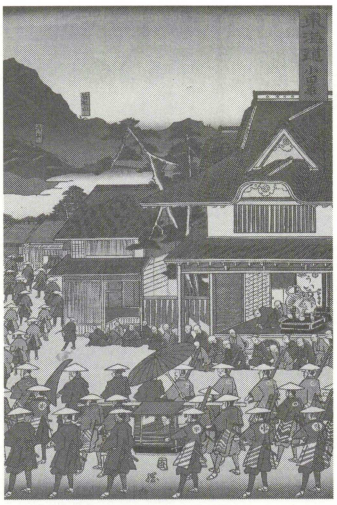

図 27　東海道 小田原　国綱（二代）（二代国輝）
神奈川県立図書館蔵

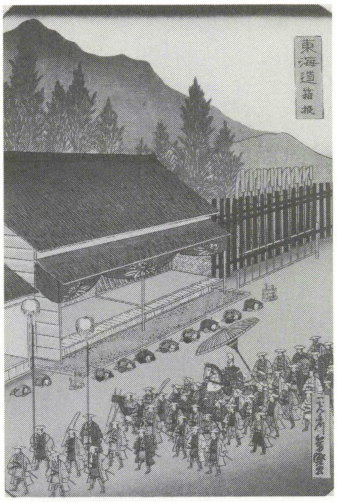

図 28　東海道 箱根　芳盛

図 29　東海道名所之内 箱根山中陰石　河鍋暁斎

図 30　東海道名所之内 箱根山中猪狩　河鍋暁斎

図 31　東海道 ハコネ湯治　歌川豊国（四代）・歌川広重（二代）

図 32　東海道 箱根 畑　芳虎